みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第759号（通巻1263号）

東京YMCA

11
2018年

創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館6階
Tel 03-6302-1960
URL http://tokyo.ymca.or.jp/
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

ＹＭＣＡのグループワーク

―――― グローバル時代の新たな展開

グループでの活動をとおして人間的な成長を図る「グループワーク」。ＹＭＣＡが古くからキャンプや学校運営、地域でのボランティア活動などあらゆるプログラムで大切にしているこの手法について、その変遷や今後の期待を田中治彦さんに聞きました。

聞き手＝東京ＹＭＣＡ副総主事・星野太郎
社会体育・保育専門学校校長・堀雄二

田中　治彦さん

上智大学総合人間科学部教育学科教授。専門は青少年期の社会教育、開発教育、環境教育。
『ＳＤＧｓと開発教育』（学文社）、『ユースワーク・青少年教育の歴史』（東洋館出版）『若者の居場所と参加』（東洋館出版）ほか著書多数

グループワーク研究者として

●田中さんは大学生の時、日本ＹＭＣＡ同盟出版の本『グループワーク』を買いにいらしたことがきっかけでＹＭＣＡのボランティアリーダーになったと聞きました。

――そうです。ＹＭＣＡ主事の永井三郎氏が書いた『グループ・ワーク』を読みたいと、高田馬場駅からバスで日本ＹＭＣＡ同盟に向かったのですが、降りるバス停を間違えて東京ＹＭＣＡの山手センターに行ってしまったのです。本を買ったついでに、ちょうど募集中だったスキーキャンプのボランティアリーダーをやってみることになり、そこから人生が変わってしまいました（笑）。

●なぜ「グループワーク」を勉強しようと。

――私は中高生の頃、文通などをする全国的なサークル「郵便友の会」で活動していたのですが、大学生になって中高生のグループを指導する立場になった時にいろいろ迷うことがあって、グループワークを基本から勉強し直そうと思いました。

●山手センターではどんな活動を？

――キャンプも行きましたが、主に中高生が集まってレクリエーションやボランティア活動などを自分たちで企画実施する「グループ活動」に参加しました。大学院に行ってからはＹＭＣＡ主事と一緒に「国際理解講座」を企画するなど、開発教育にも力を入れました。大学院ではグループワークを中心に社会教育の研究をして、ＹＭＣＡでは子どもと一緒に遊ぶ。そんな生活を25～26歳くらいになっても続けていたので「自分の人生これで大丈夫なのか？」と不安にもなりましたが、それがそのまま仕事になりました。

若者の集団離れの時代に

●けれども１９８０年代からＹＭＣＡのグループ活動は減っていきました。

――ＹＭＣＡに限らず，ボーイスカウトや子ども会など、グループ型の青少年活動がすべて減少していきました。若者たちの集団離れです。ＹＭＣＡのキャンプや野外活動は人気でしたが、「グループ活動」はなくなっていきました。今もその傾向は続いていますね。グループで団結して盛り上がるような活動を嫌う若者は少なくありません。

●なぜでしょうか。

――グループ活動が全盛期だった頃は、ちょうど高度経済成長期で、社会の言うとおりにやっていれば将来に希望がもてた時代です。だから集団活動のもっているある意味で面倒な部分も我慢できたのではないでしょうか。でも今の社会では、成長とか発展なんて信じられなくなっていますから、学生のアンケートなどでも「健康」「家族」など自分の幸せや楽しみを優先する傾向が強く、「社会貢献」や「収入」などへの関心は低いです。

グループワークの起源と目的

●集団活動はもう時代遅れなのでしょうか。

――グループワークはもともと、集団活動を強要するものではありません。その起源は１９００年前後のイギリスで、ＹＭＣＡ、ボーイスカウト、それにスラム街の貧困問題を解決するため行なわれた「セツルメント運動」です。外側からの一方的な援助でなく、共に活動しながら自分たちで助け合って改善しようと、グループワークの手法が用いられました。

●日本ではいつ頃から行なわれたのでしょう。

――戦前からＹＭＣＡのキャンプなどで試みられていましたし、また農村の青年団の指導者養成の合宿でもそれに似た手法がとられていましたが、本格的に導入されたのは終戦直後です。軍国主義を払しょくするための民主主義教育として、アメリカから輸入されました。全体主義に対抗するのは小集団で、個々の興味関心が活かされるような自由な小集団を全国に作ることが民主化につながると考えられたのです。

ＹＭＣＡのダーギン氏やタイパー氏など主事たちはこの導入のため全国で指導をして大きく貢献しました。そしてこれが日本の社会教育の基盤になっていったのです。

●当時はどんな活動をしていたのですか。

――ＹＭＣＡなどの青少年団体だけでなく、農村の公民館で模擬討論会が行なわれたりしました。「オリエンテーション」「ディスカッション」「レクリエーション」など、「ション」がつくことをする「ションション青年団」などと言われていたようですが、徐々に浸透して、青年たちが村の課題を民主的に解決したり、農村復興のための自助活動を始めたりした。そしてそんな事例を青年団の全国大会で発表する機会もあり、これこそ戦後民主主義だと、「静かな革命だ」と言われるほど、社会に大きな影響を及ぼしました。私が買った『グループワーク』の本も隠れたベストセラーとして、社会教育関係者の間で広く学ばれたのです。

「居場所」とグループワーク

●これからの時代には、どんなグループワークが求められるでしょうか。

――今は集団離れが進んでいく中、にもかかわらず若者たちは自分の居場所を求めていると感じています。私は２００１年に『子ども・若者の居場所の構想―「教育」から「関わりの場」へ』（学陽書房）という本を萩原建次郎さんと一緒に出しましたが、居場所は、個人でも参加できる安らぎのある場所です。

けれども居場所作りは、実際にやってみるとグループワークが必要なのですね。個室とは違うので、人とのつながりや生活実感がないと居場所にはならない。個別のカウンセリングもしますけれども、個々の人間を活かしながら、社会とつなげていくようなグループワークや、グループカウンセリングなどを組み合わせてやらないと居場所はできません。

ブラック企業もある時代、私は学生たちに〝経済活動〟とは違う「居場所」をもっておくことを勧めていますが、どんな人にも居場所は必要です。ＹＭＣＡはもともとロンドンで若者の居場所として誕生した団体なのですから、ぜひそんな居場所であり続けてほしいと思います。

学習指導要領の改訂とＳＤＧｓ

――もう一つ重要なポイントは、〝社会つながりのあるグループワーク〟という視点です。

＝２面へ続く

「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」として２０１５年に国連で採択された17の国際目標（＝２面参照）

赤▽三角

今年３月、心臓手術をした。それを聴いて、元主事の小林明彦さんが我が家に駆けつけてくださった。51年前の夏、私は主事として、また小林さんはボランティアリーダーとして、東京ＹＭＣＡ観音崎キャンプ場で過ごした。小林さんは、自分の人生はその時に決定づけられたという。「ＹＭＣＡは、人の一生を決定づける場所であり、人との出会いの場所である」と▼考えてみれば私も学生寮山手学舎での４年間で神と出会い、ＹＭＣＡに献身した一人である。心から尊敬する牧師やＹＭＣＡ主事そして友人に出会った。一生の宝である▼昨年、日本のＹＭＣＡは長く親しんだロゴマーク（赤三角形）とスローガンを新しくした。ＹＭＣＡを社会に向けてどう表現するかの試みであり、組織の目指す方向を一つにしたいと願ってのことと思う▼ＹＭＣＡをどこに進めるかという「全体の意思」と、人に関わる「細部へのこだわり」の両方を誠実に追うことが求められる。社会の評価をと願うあまり、足元をおろそかにしてはならない。地道に隣人のために祈り、その傍らに立ち続ける活動に「全体の意思」を込めることがＹＭＣＡの使命であろう。（東京ＹＭＣＡ元主事　本行輝雄）

1面より

２０２０年に学習指導要領が改訂され、「持続可能な社会の創り手」を育てることが教育の目的になります。戦後の教育基本法の目的である「平和で民主的な国家及び社会の形成者」の育成が改訂されるのは実に70年ぶりのことです。

国連でも２０３０年までの国際目標として「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ　エス・ディー・ジーズ）」が掲げられ、すでに多くの企業なども取り組み始めていますが、これらのことはＹＭＣＡなどの社会教育団体にとっても看過できないことです。

今の子どもたちは２１００年まで生きる世代ですから、その時に地球の気温が４・８度上昇しているか２度以内かは死活問題です。遠い未来の話ではありません。

●学校では具体的にどんな教育がされるのでしょうか。

――すでに一部の「スーパーグローバル・ハイスクール」が先駆的に実施していますが、まさに開発教育・環境教育です。私のところにもよく問合せがきますが、アジアの高校と交流しながら、地球規模の課題と自分を結びつけ、自分の地域で何ができるかを考えていくといった、知識として学ぶだけでない、参加体験型の地球市民教育です。

開発教育・環境教育

●田中さんは「ＮＰＯ法人開発教育協会（ＤＥＡＲ）」に設立時から携わっていますね。

――私は１９７５年、政府が主催する「東南アジア青年の船」に参加して２ヶ月間、タイやマレーシアなどの青年たち１５０人と一緒に各国を回ったことがきっかけでアジアと関わりたいと思うようになり、開発教育を研究しました。

けれども当時日本には、開発教育もその教材もなかったので、私たちは欧米に学びながら、ＹＭＣＡのリーダートレーニングでやっていたグループワークに、貧困問題や南北問題、国際協力などをミックスして、参加体験型の教材を作っていきました。（＝写真）

一つの教室内で、１００個のアメを国民所得に応じて分けるなどして格差体験をする『世界がもし１００人の村だったら』や、技術だけがある国、資源だけがある国、資源と技術の両方がある国、何もない国に分かれて製品を作る『貿易ゲーム』。そんなＤＥＡＲの代表的な教材はこうやって生まれたものです。

１９８２年に開発教育協会（ＤＥＡＲ）を結成したときには、ＹＭＣＡが事務局や役員を引き受け、また多くのＹＭＣＡ関係者が会員になって協力してくれました。

●ＹＭＣＡでも１９９０年代、環境教育プログラムを取り入れようとした時期がありましたが、あまり定着しませんでした。キャンプはプログラムよりも生活自体を基本にするため、マッチしなかったと思います。

――キャンプは特に環境教育プログラムなどをしなくても、自然の中での生活それ自体が環境教育ですよね。今、さまざまな団体で「ＳＤＧｓ」のためのプログラムが開発されていますが、ＹＭＣＡのキャンプはその昔から、人間関係作りも含めてＳＤＧｓ的な活動です。やっと世の中が追い付いてきた、と言っても過言ではありません。

「ＳＤＧｓ」とグループワーク

●「持続可能な社会の担い手を作る教育」とグループワークはどう結び付くのでしょうか。

――貧困、人権問題、環境問題などの課題を、遠く離れた国の問題として知るのではなく、自分とのつながりを見出すこと。そしてそういう状況下で海外の若者たちと人間関係を築き、共に課題に向き合おうとするとき、グループワークの手法が必要になります。またその関係性の中で自分自身を見直し、自分のライフスタイルも変え、社会を変えていこうとするような、相互性のある開発教育や国際交流プログラムにはグループワークが有効です。

ＹＭＣＡは50年余り前から「Think globally, Act locally　世界を見つめ、地域に生きる」をスローガンとしてきましたが、今まさにそういうプログラムが必要とされています。国際交流、地域活動、開発教育、グループワーク、そんなＹＭＣＡの得意としてきた手法を組み合わせて、持続可能な社会を作っていくことが期待されていると思います。

（文・広報室）

⇒ＹＭＣＡのボランティア研修で行なっている「チームビルディング・アクティビティ」の一コマ。チームづくりとチームの力を導き出すための活動である。個人が伸び伸びと力を発揮できる良好なグループからは、ダイナミックな活動が生みだされ人間的にも成長すると、企業研修等でも用いられている。

開発教育協会（ＤＥＡＲ）とは

約50の民間団体と約700名の個人から成る教育ＮＧＯ。1982年の発足以来、国際理解や国際協力をテーマとした参加型学習を普及推進。数々の教材を作成しているほか講師派遣やセミナー開催など幅広く活動している。田中治彦さんは理事を務める。団体のホームページはこちら⇒
ワークショップの動画なども掲載されています。

http://www.dear.or.jp/

←開発教育協会の人気教材
「ワークショップ版
・世界がもし100人の村だったら」

世界の格差や多様性を体感するこの教材は、発行部数1万冊を超え、全国の小中学校や大学などで活用されています。
2004年に国際人権教材アウォード受賞。

総主事カフェ

東京ＹＭＣＡ総主事　菅谷　淳

総主事カフェにようこそ。

新約聖書のマルコによる福音書第６章に「五千人の給食」と呼ばれるイエスの奇跡が書かれています。簡単に紹介すると、イエスとその弟子が迷える五千人を相手に説教をしていました。夕食の時間になったので、弟子たちは彼らを解散させたいと申し出ますが、イエスは「あなた方が彼らに食べ物を与えなさい」といいます。今ある分を見たらパンが５つと魚が二匹しかありません。弟子たちは無理だとあきらめました。しかしイエスはパンと魚を手に取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え弟子たちに配らせました。すると全ての人が満腹したというものです。この奇跡はマルコだけでなく、マタイ、ルカ、ヨハネによる福音書全てに登場します。それほど弟子たちにとっては印象の深い出来事だったに違いありません。

話は変わりますが、２０１０年10月南米チリで落盤事故が起きました。新聞やテレビで報道されたので皆さんもご記憶のことと思いますが、地下６３４メートルに33人が閉じ込められ、事故発生から発見まで18日間、生存が確認されて全員が救出されるまで69日間もかかったという仰天ニュースでした。

彼らは50平方メートルほどの待避所にいましたが、そこには、33人にとってわずか3日分の食料しか備蓄されていませんでした。

彼らは一日おきに一人小さじ2杯のマグロの缶詰と牛乳一口、ビスケット1枚を平等に食べようと決めました。通常の一食分にも満たない食料を48時間おきにしか食べられないルールです。坑道の通風孔が空いていたので空気はなんとか確保できましたが、水はトラックのラジエターや地下水を飲んでいたそうです。またトラックのバッテリーで光を得ていました。「今日食べたら明日は食べられない」という尋常でない状況でそれでも彼らはあきらめず投げ出さなかったのは、「必ず助かる」という「希望」を忘れなかったからだといいます。

私はこの事故の記録を読んで、先ほどの聖書の箇所を思い出しました。

誰もが「パン５つと魚２切れしかない」というあきらめと絶望の中で、イエスは賛美の祈りを唱えたのです。弟子たちがたったのこれっぽっちと思った「５つのパンと２匹の魚」は、実は救いを求めている五千人の民にとって希望の象徴であったのです。

生き埋めになったチリの工夫全員が、わずか３日分しかなかった食料を、「たったこれだけしかない」とあきらめず、「いつか出られるという」という「希望」をもって分け合い、18日間も持たせたことこそ、まさに奇跡ではないでしょうか。彼らが閉じ込められた狭いシェルターに比べたら、私たちが毎日生活しているこの世界はまさに天国です。にも関わらず必要以上に奪い合い、憎みあっている現状はなかなか変わりません。私たちが皆、「いつか必ず正義と平和な神の国がやってくる」という「希望」を持ち続けながら生きていくならば、この先どんなに辛いことでも乗り越えられると信じています。

子育てコラム

出会いは偶然？それとも必然？

生後半年にも満たない赤ちゃんを愛しむように抱いて来るお母さん。寸暇を惜しむように走って遊びに来る小学生。時間潰しのためにふらっと立ち寄る中高生。お孫さんの手を引きながら遊びに来るおばあさん等々。児童館はまさに「０歳から１００歳まで」の施設です。これらの人々と児童館で出会えることは「偶然」なのでしょうか？

私には父と母がいます。その父と母にも両親がいます。その先は…。２、４、８、16、32、64、１２８、２５６、５１２、１０２４…。

単純に計算すると、私の10代前には千人を超える先祖が、20代前には１００万人を超える先祖たちがいました。そのご先祖様がそれぞれの時代で一人も欠けることなく「偶然」出会って結婚してくれたおかげで、私は生まれることができたことになります。そして、私が日々出会う子どもたちやお母さん、おばあちゃんも同じ確率で今世に「偶然」生まれてきたことになります。

私の恩師は「偶然がそんなに続くはずがない。だから人と人との出会いは必然なんだよ」と教えてくれました。

人と人との出会いが偶然ではなく、出会うべくして出会う「必然」だとしたら、いい加減な出会いをして良いはずがありません。

来館・退館時のあいさつだけでなく、その日の表情、顔色、言葉遣い、体調を気に掛け、会話を楽しみ、一緒に遊び、時には相談相手にもなる。

何百年、何千年も前から神様が決めてくださっていた「必然の出会い」だからこそ、今日の１つ１つの出会いで出来ることは何かを考え、疎かにすることが無いよう来館者と接していきたいと思っています。

江東区東雲児童館
館長　三輪　浩尉

「ソウル・台北・東京YMCA指導者協議会」

北東アジアの平和と安定を願って

アジアの三大都市YMCAが2年毎に集まって共通の課題を協議する「ソウル・台北・東京YMCA指導者協議会（STTT）」が10月17日から3日間ソウルYMCAで開催され約50人が参加。東京YMCAからは総主事や委員など8人が出席した。1978年から続くこの会は、今年で第20回40年を迎える。会期中の礼拝で奨励も務めた坂口順治さんに、会の様子をきいた。

ソウルYMCAスタッフと東京の参加者たち。右から5人目が坂口順治さん

YMCAの〝心の豊かさ〟実感

東京YMCA名誉会員　坂口順治

第20回を迎えたSTTは、保育園児の大合唱で幕を開けた。純白のユニフォームで、力強い振り付けとともに大きな声で真剣に歌う園児たち。その眼はキラキラと輝き、未来への希望と勇気を感じさせてくれた。

今年の主題は「北東アジアの平和と安定―YMCAの役割」。南北問題や北東アジアの政治・経済の諸問題についての基調講演と各地の活動報告を受けて、三都市YMCAの課題を討議するとともに、新しい時代のYMCAの役割を語り合い、友好を深めた。

三都市に共通した活動と課題はリーダーシップの開発、会員増強、ユースの活動、市民コミュニティー活動、スポーツ、福祉活動、生涯学習活動、国際交流活動、新プロジェクトへの挑戦などであった。

私にとって特に印象的だったことが2つある。1つは、YMCAに集まる人たちの心の豊かさである。〝自分ファースト〟がはびこる今の時代、他者に心くばりをして共に生きる喜びを分かち合い、平和と安定を求めつつ生活をしている人たちは、心の豊かさをもっていることを再認識した。それぞれの国はアジアの中で微妙な関係にある。政治も経済も利害関係は対立する。しかし「主にある交わり」を同じくする者は、それを乗り越えて祈りつつ日々の生活に安らぎと希望をもっている。まさに隣人を愛する集団である。どのような社会状況にあってもYMCAは、聖書に照らされた生き方を伝えることによって平和を築いていく役割があると、あらためて感じた。

もう1つは、YMCAは人を育てる哲学をもっていることである。三YMCAの報告を聴いて、人との交流が人格の成長を促し、YMCAを支える原動力になっていることを再認識した。子ども も青少年も高齢者のプログラムにも、ボランティアリーダーや友人との関わりを媒介にした人格的な成長がある。そこには信頼関係が生まれ、その信頼が新しい生きる勇気を生み出すからである。聖書の言葉「二人または三人が集まるところには、私もその中にいる」（マタイによる福音書18章20節）を実感した。

悲しみ負った子どもたちに心が明るくなる体験を

【西日本豪雨災害】リフレッシュキャンプ

7月の西日本豪雨災害で被災した子どもたちを励ましそうと10月27～28日、広島の研修施設「YMCAコンフォレスト湯来」を会場に「思いっきり楽しもう！わいわいキャンプ」が開催され、30人の小学生が参加しました。主催は広島YMCA。東京YMCAは職員とボランティアリーダー計5人を派遣しました。

全国YMCAはこれまで東日本大震災や熊本地震でも、心のケアのためのキャンプを実施していますが、実際に子どもたちは、安心できる環境で「今日は楽しかった」と思える体験を重ねることで元気になっていくといわれています。今回のキャンプも、子どもたちが被災による辛い気持から身動きできずに追いつめられてしまわないよう、楽しい2日間を過ごしてほしいと願って開催されました。

参加した職員の押山愛紀子さんに報告を聞きました。

◇　◇　◇

今回のキャンプは、東京のほかに富山、広島のリーダーと、ワイズメンズクラブの方々など総勢30人の手厚いスタッフ体制で行われました。野外料理ではたこ焼きや豚汁など数種のメニューが選択できたほか、ワイズメンズクラブの方と一緒にピザを作ったり、飾りつけもしてハロウィンパーティーをするなど、文字通り楽しいキャンプとなりました。

子どもたちは寸暇を惜しむように走りまわったり、おしゃべりをしたりと大喜びでしたが、あまりに大はしゃぎする姿に、日常のストレスが伺えるような気もしました。実際に、「裏の家の人、生き埋めになったの。今は元気だけど」など、何気ない会話の端々に災害の爪痕が見えることもあり、子どもたちがキャンプから帰った後も笑顔でいられるようにと願わずにいられませんでした。

この広島リフレッシュキャンプをとおして、人を元気づけていくキャンプの力を体験できたことは、良い勉強になりました。多くの方の募金によってこのキャンプができたことを、心より感謝いたします。

（山手センター　押山愛紀子）

ぶどうの枝　YMCAの人

東京YMCA理事／株式会社JACOM会長　若槻（わかつき） 史郎（しろう）さん

奇蹟のような出会いだった。

出身は島根県。荒れた高校時代を過ごし、大学受験に失敗。志望とは違う大学に入って上京した。マンモス大学で、授業もつまらなくて悶々と過ごす中、講堂の扉に手書きのポスターを見つけた。「キリスト教の学生寮～東京YMCA山手学舎」。キリスト教とは無縁だったが、なぜか興味をもって電話。「キリスト教関係者が対象です」と断られたにもかかわらず「話だけでも聞いてほしい」と訴えた。欠員が出るなど偶然が重なり、1963年に入舎した。

山手学舎は、さまざまな大学の学生が共同生活する寮である。当時は朝夕に礼拝があり、教会に通うことも条件になっていて「まったく別世界だった」。何より大学も、出身も、家庭事情も異なる学生たちとの共同生活から多くを学んだ。

「カルチャーの異なる人同士の生活から、逆にその違いを超えた、赤裸々な人間がみえてきた」。どんな人にも欠損した部分がある。人間を知ること、自分を知ること。コミュニケーションの仕方。そんな「生き方の基礎みたいなものが培われた」。大学2年の時に受洗。中でも「隣人を自分のように愛しなさい」の聖句は、その後の人生の柱になった。

卒業後は広告製作会社のコピーライターなどを経て30歳で独立。広告戦略を立案する会社で、パソコンが初めて世に登場した時、トップメーカーと共にその販売戦略を築いた。後には自動車や住宅、家電メーカーや行政など、さまざまな業界の仕事もした。企業理念は「人間賛歌――人間（ひと）に出会い　人間（ひと）と感動」。人間を大切にする会社にしたいと、早稲田教会の上林順一郎牧師と作った理念だ。「会社の危機は何度もあったが、いい仲間に恵まれて生き残れた。この理念のおかげです」。

2011年の東日本大震災後、学生の被災地ボランティア活動費として山手学舎に10年間の基金を寄付した。「YMCAにはこれからも、人を育てる団体として活躍してほしい」。

（聞き手・文　広報室）

＊インタビュー全文はホームページで。http://tokyo.ymca.or.jp/about/interview.html

「第4回　わいわいハロウィン in しののめ」

小さな子どもも安心、親子連れ1000人が参加

江東区東雲（しののめ）地域で10月31日、東京YMCAが運営する保育園や児童館など5カ所の施設を周るスタンプラリー「わいわいハロウィン in しののめ」を開催しました。

このハロウィンは、子どもたちが楽しめる地域イベントをとおして「東雲地域のふるさと作りをしたい」との願いから2015年、UR都市機構とYMCAが協力して始めたもの。東京YMCAはこの地域で、江東区児童・高齢者総合施設グランチャ東雲をはじめ、こども園、児童館、コミュニティーセンター、オリーブ保育園、キャナルコート保育園と3つの学童クラブを運営しており、各施設が連携すれば地域全体に広がる大きな楽しいハロウィンイベントができると考えました。

当初はYMCAの保育園や学童クラブに通う子どもたちが中心でしたが、「小さい子どもも安心して参加できるハロウィン」として口コミで広がり、今年は1000人の親子が参加。東雲の街に行列を作りました。

子どもたちはキャラクターの衣装やドレスなど、お気に入りの仮装をして各施設を回り「トリック　オア　トリート！」。お楽しみグッズを集めました。出迎えた職員も力を入れて仮装したほか、東京YMCA社会体育・保育専門学校の学生ボランティアたちはお化け屋敷や輪投げなど遊びコーナーを作って子どもたちと交流。東雲児童館にはフォトスポットも設置され、参加した親子連れからは「楽しかった」「来年も来たい」と、たくさんの嬉しい声が寄せられました。

（東雲コミュニティーセンター　加藤結希乃）